

．大学・学生ボランティアセンターの

現状と課題からみる将来像

8つの大学・学生ボランティアセンター事例から

山本 有紀

本論文は卒業論文「大学における市民育成の可能性についての考察 大学・学生ボランティアセンターの事例から」に加筆・修正を加えたものです。このような機会を与えてくださった津止先生に感謝します。

まえがき

近年、ボランティアという言葉が世間一般にもなじんできた。1995年の阪神・淡路大震災（ 1 ）の際には、1995年が「ボランティア元年」といわれ、2001年は「ボランティア国際年」であったように、さまざまなところでボランティアは活躍し、その存在が認知されるようになった。

大学等高等教育機関(以下大学等)においてもそれは例外ではない。近年、特に1995年以降、大学内にボランティアセンターが作られるケースが増加している。学生主体のボランティアサークル、つまり施設や海外などについてボランティア活動を「する」団体はこれまでもあったが、大学が学生に対するサービスや社会貢献という意味で、また、学生主体の場合は、これまでのボランティア活動を発展させ、多くの学生にボランティアを知ってほしいというところで、学生にボランティアを紹介するセンターを作っているのである。

筆者も、大学入学時から、関西学院ヒューマンサービスセンターというボランティアセンターを拠点にボランティアコーディネーターとして、また2

年生になってからは学生代表として活動を展開してきた。4年間を通じて、さまざまなボランティア・NPO団体を知り、多くの方と出会ったが、特に関西学院ヒューマンサービスセンターと類似する大学内にあるボランティアセンターで活動をする学生や専属の職員と情報や意見の交換を行ってきた。その中で、感じるようになったことは以下の2点である。

1. 大学内にボランティアセンターがある意味は何か
2. 大学・学生ボランティアセンターはどのような方向に向かうのか

これらの問いは、非常に根本的な問いである。しかし、さまざまな大学・学生ボランティアセンターを見ているとそれらを問わずにはいられない状況に直面した。それは、たとえば専属のボランティアコーディネーターをおいていても、十分なコーディネートができていない、学長の名誉で作った、などである。であるから、どのように運営したらよいかわからない、学生側からしたら大学との付き合い方がわからないなどの困惑の状況が見受けられた。

このような状況を見ていると、これまでの大学・学生ボランティアセンターを振り返り、課題を整理することが求められていることを痛切に感じる。そこで、本論文では、筆者の4年間の経験と、8つの大学・学生ボランティアセンターへのヒアリング調査を通じて、上記の問いへの答えを出していきたい。

本論文の構成は、はじめには現在の大学を取り巻くボランティアの状況について、特に大学のボランティアに関する政策動向などを踏まえ述べる。また、大学におけるボランティア窓口、大学・学生ボランティアセンターの概観にもふれ、本研究の目的について述べる。第二章では、大学・学生ボランティアセンターの現状を把握するために、8つの大学にヒアリング調査を行い、その課題の分析などを行ってきたので、その調査概要を示す。第三章では、調査に基づいた報告を行う。この報告は、いくつかの質問項目ごとに、それぞれの大学がどのような見解を持っているか、という視点から報告していく。第四章では、調査結果を踏まえ、大学・学生ボランティアセンターが向かうべき方向を示したい。

なお、以下で出てくる大学等のボランティアセンターの名称はさまざまだが、ここでは大学等内にあるボランティアセンターを総称して「大学・学生ボランティアセンター」と呼ぶことにする。

最後に、ヒアリングに快く応じてくださった方々をはじめ、論文の作成に当たりお世話になった方々と、この4年間出会い、筆者を成長させてくださった方々に心から感謝したい。ありがとうございました。

【目 次】

まえがき

目次

はじめに 大学におけるボランティアを取り巻く環境

1-1 大学におけるボランティア窓口に関して

1-2 大学・学生ボランティアセンターに関して

1-3 研究の目的

第二章 調査概要

2-1 調査の視点

2-2 調査の方法

2-3 調査の対象

第三章 調査報告および考察

3-1 設立の経緯

3-2 ミッション

3-3 事業内容

3-4 現在抱えている課題

3-5 将来展望

3-6 まとめ

第四章 今、大学・学生ボランティアセンターに求められること

4-1 大学・学生ボランティアセンターに求められることとその存在意味

付録資料

はじめに 大学等におけるボランティアを取り巻く環境

本章では、大学等においてボランティアというのがどのように認知され、ボランティアがどのように取り上げられているかについて述べる。まず、大学等におけるボランティア窓口についての現状、大学・学生ボランティアセンターの現状について概観を述べていくこととする。また、なぜ、このような研究が求められるのか、本研究の目的についても記す。

1-1 大学等におけるボランティア窓口に関して

大学において、1995年の阪神淡路大震災、1996年の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」、1998年の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」や2002年の中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」をみると、ボランティア活動の推進が強調されるようになってきたのは明らかである。

また、大学というところは、筆者がこれまで受けてきたさまざまなボランティア依頼を聞いていると、「若い学生がいる」、「学生だから時間がある」などの理由から、ボランティアを必要とする側からしても、ボランティアを集める適切な場所といえる。その依頼は手紙や訪問、電話などさまざまな方法であるが、大学にそのような依頼が来るとき、実際の大学等ではどこが窓口となっているのであろうか。

大学におけるボランティア活動にかかわる場所、というものを考えてみると、ボランティア窓口、ボランティアコーナー、ボランティアセンター、ボランティア情報室、ボランティアサークル、ボランティア部などが挙げられる。

これらの違いを簡潔に述べておく。まず、ボランティアサークルやボランティア部というのは、あくまでもボランティア活動を「する」集団を指すことが多く、ボランティアセンターとは言いがたい。また、窓口、コーナー、センター、情報室など呼び方は多様であり、ボランティア情報掲示板のみのところからボランティアコーディネーターが専属でいるところまでさまざ

まな状況がある。また、設置をしているところも学校法人や大学、また学生の有志など様々な設置主体があることも以下に述べる調査で明らかになっている。共通して言えることは情報提供をなんらかの形で行い、学生のボランティア活動を支援しているという点である。

そこで、本論文では、「学生の自主的（自発的）な活動を支援する場」として大学・学生ボランティアセンターとして位置づけることとする。

ここに「平成 13 年度 11 月 19 日実施調査の協力を受けた大学等の学生ボランティア活動関係の担当部署一覧」(2)がある。これは、2002 年 12 月に行なわれた内外学生センター主催の「平成 14 年度学生ボランティア活動支援・促進のための連絡協議の集い」という会の際に配布された資料である。この一覧をみると、ボランティアセンターというのはほとんどなく、担当部署は「学生部」や「学生課」が圧倒的多数を占めていることがわかる。また、それらの窓口の担当職員は、平成 13 年度の内外学生センターの調査によると、約 9 割が他の業務と兼任しており、担当者数は 1 名から 2 名というところが 6 割を占める、という結果が出ており、実際にボランティアに関する業務を積極的に行っている大学等はまだ少ないといえる。

実際、上記のシンポジウムに出席した際に、職員から「ボランティアとは何か」、「どのようにやればよいのか（ボランティアを学生に勧めたらいいのか）わからない」という声が多数聞かれた。つまり、ボランティア担当の職員はほかの業務との兼任はもちろん、ボランティアについて知らない職員が業務として受け付けているというのが現状である。

1-2 大学・学生ボランティアセンターに関して

現在、日本において大学等は約 4200 カ所 (3)あるといわれている。大学・学生ボランティアセンターはそのうち、筆者が把握している分で 46 ケ所ある（付録資料 1 参照）。46 ケ所しかないわけであるから、その数が非常に微々たるものであることは明らかである。

大学・学生ボランティアセンターは、1987 年に大阪キリスト教短期大学（大阪市阿倍野区）にボランティアコーナーが、日本児童教育専門学校（東京都

新宿区)にボランティアセンターができたのが、筆者が把握している限りにおいて、最初である。その後、1991年には関西国際大学短期大学部(兵庫県三木市)に、1993年には淑徳短期大学(東京都板橋区)にボランティアセンターが徐々に作られていくようになった。

そして、1995年の阪神・淡路大震災により、関西学院ヒューマンサービスセンター(兵庫県西宮市)や神戸大学総合ボランティアセンター(兵庫県神戸市)ができてきた。その後は、この2、3年の間に設置したところが多く、さまざまな大学等にボランティアセンターができています。

また、2002年の中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」の中で、

「大学，短期大学，高等専門学校，専門学校などにおいては，学生が行うボランティア活動等を積極的に奨励するため，正規の教育活動として，ボランティア講座やサービスラーニング科目，NPOに関する専門科目等の開設やインターンシップを含め学生の自主的なボランティア活動等の単位認定等を積極的に進めることが適当である。」

とし、「学生に対する支援体制の充実」においては、「地域のボランティアセンター，学生関係団体等とも連携しつつ，大学内において，以下のような支援体制を整備する」としている。具体的なものとして、「学生部等に情報提供、相談窓口の開設」、「大学等のボランティアセンターの開設(専任職員、ボランティアの配置)」をあげており、今後、ますます大学におけるボランティアセンターは増えていくものと考えられる。

1-3 研究の目的

本調査は大学・学生ボランティアセンターのおかれている現状と課題を把握するために行われた。

上記のような現状の中で、大学生のボランティア活動について触れられた論文はあるが、大学・学生ボランティアセンターの全体像を把握できるような研究というのは十分に行われているとはいえない。

論文としてあげられるものは、まず、「大学とボランティア 市民社会化の展開の中で」(岡本・2000)である。大学がどのようにボランティア活動の推進に努めるべきであるかということについて述べてあり、ボランティアセンターの役割を列挙しながらボランティアセンターが重要であることを記している。また、「学生のボランティア活動の推進・支援にむけて - 大学・短大ボランティアセンターの可能性を探る」(池田・2001)では、大学におけるボランティア活動支援という視点が主になっており、設立背景や活動内容に簡単に触れただけの内容となっている。その内容に関しても、リーフレットやホームページを参照しているだけある。次にあげられるものとして、「ボランティアセンター基本構想に関する提言」(塚田ら・2002)がある。これは吉備国際大学にボランティアセンターを作るにあたって他大学のボランティアセンターをヒアリング調査したものである。さまざまな大学・学生ボランティアセンターを知ることができるが、それぞれのボランティアセンターについて深く言及しているものではない。

このように、大学・学生ボランティアセンターの現状と課題を把握している研究はないといってよい。そこで、本研究により大学・学生ボランティアセンターがおかれている現状を明らかにし、どのような方向に向かうべきなのかを示したい。

第二章 調査概要

本章では、筆者が大学・学生ボランティアセンターの現状と課題を把握するために行った8つの大学・学生ボランティアセンターへのヒアリング調査の調査概要を述べる。最初に調査項目を挙げ、調査の方法について述べ、調査対象となった大学・学生ボランティアセンターの名称を記す。

2-1 調査の視点

本調査においては、以下のような質問を設定することで、現在、大学・学

生ボランティアセンターがどのような経緯でつくられており、現状がどのようなになっているかを把握できるように努めた。また、課題をあげてもらい、それらを分析することにより、大学・学生ボランティアセンターが目指すべき方向や求められていることを整理できると考えた。

調査は、2002年6月28日から2002年11月22日まで、東京、神奈川、兵庫、京都において実施した。

1. 設立の経緯

- なぜ作ろうとしたのか
- ボランティアセンターができるまでの準備
- 設置方法

2. ミッション

- ミッションは何か
- ミッションの共有と確認はどのように行われているか

3. 組織図

4. 事業内容

5. 現在抱えている課題

6. 将来展望

- 今後、ボランティアセンターはどのように変化していくべきか、していったらいいか
- 大学にボランティアセンターがある意味
- ボランティアセンターを一言で言うとどのような場所か

2-2 調査の方法

調査対象は、「SVnet」(4)や「大学・学生ボランティアセンター研究会」(5)の資料をもとに選定した。具体的には、設置時期、地域、規模、構成員、課題などの内容が広く網羅できるように候補を絞った。候補を絞った後、電話によって調査の協力を依頼した。また、調査依頼はEメールによって行った。

調査対象には、事前に前節の主要質問事項を伝え、訪問の際には、質問へ

の回答を中心にインタビューを行った。また、各種資料も入手し、参考にした。インタビューの際には、主要質問項目について適切な回答を得ることができた。調査に回答してくれた方は、専属職員を設置している場合はその職員が、また学生が行っている場合は、依頼を受けてくださった学生が応じてくれた。

追跡調査として、論文作成に当たり、補足をする必要があると考えられた項目については、必要に応じてEメールで問い合わせをした。それらすべてから十分な回答をいただくことができた。

2-3 調査の対象

今回の調査の対象となったのは、下記の8つの大学・学生ボランティアセンターである。なお、明治学院大学ボランティアセンターは2つの校舎それぞれにボランティアセンターが設置されているので、両校舎のボランティアセンターにヒアリングを行った。

関西学院ヒューマンサービスセンター
兵庫県西宮市

早稲田学生ボランティアセンター
東京都新宿区

明治学院大学ボランティアセンター
神奈川県横浜市・東京都港区

龍谷ボランティア・NPO活動センター
京都府京都市

大正大学学生ボランティアセンター
東京都北区

立教大学ボランティアセンター
埼玉県新座市

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
東京都新宿区

立命館大学ボランティアスタディセンター（仮称）
京都府京都市

第三章 調査報告および考察

ヒアリング調査を通じて、これまで明らかにされてこなかったミッションや課題などさまざまな事柄が明らかになってきた。

本章では、ヒアリング調査で明らかになった大学・学生ボランティアセンターの現状について、それぞれの質問項目ごとにその特徴を記していく。基本的な調査結果については、付録 2～4 までにまとめてあるので参照されたい。

3-1 設立の経緯

1) なぜ作ろうとしたのか

大学・学生ボランティアセンターはさまざまな経緯によって作られていることが調査により明らかになってきた。社会の時代背景と、大学の状況、たとえば経営状態や設立時にいた教職員、学生によって左右されていた。その中でも、大きく分けて二つの設置理由が挙げられる。

まず一つ目は阪神・淡路大震災である。半数の大学・学生ボランティアセンターがその流れを受けている。震災時にボランティアとして活動をした学生や教職員が、ボランティアセンターの必要性を感じたり、ボランティア活

動での経験を生かしたい、というのがボランティアセンターとして平常時も活動を展開していく原点になったようである。被災地にあった関西学院ヒューマンサービスセンターはもちろん、早稲田学生ボランティアセンター、明治学院大学ボランティアセンターがそれである。また、設立年は2001年と最近であるが、龍谷ボランティア・NPO活動センターも阪神・淡路大震災の影響を受けていた。

二つ目にあげられるのが、それぞれの大学もしくは学生の独自のニーズによる理由である。ニーズとして共通したものは見られない。この1,2年の間にできている大学・学生ボランティアセンターは、大学の経営の中に取り込まれるものや、学生自身がボランティアセンターの必要性を感じてつくるなど、その大学もしくはある大学所属する学生にしか見られない独自の理由により、ボランティアセンターの必要性を感じ取り作っているということができる。

2) 設立までの準備

新しい組織を作るということは、今日作ろうとって、明日から出来る、というものはない。それなりの準備を経て作られるものである。大学・学生ボランティアセンターも同じように、それぞれの大学・学生ボランティアセンターで準備が重ねられているようだ。

準備期間は平均すると1年程度である。その間に、それぞれの大学・学生ボランティアセンターで準備が重ねられているわけだが、準備内容のタイプは3つのタイプに分けることができる。

まず一つ目は、経験知である。被災地にあった関西学院ヒューマンサービスセンターは、特に勉強会などの準備などなく、3ヶ月間の救援ボランティア委員会でのコーディネート活動などで得たものをそのまま反映させるという方法をとった。

次に模索をしながらの整えていくタイプである。早い時期にできた大学・学生ボランティアセンターは前例というものがなく、どのように運営をしていったらいいのか、人集めをどうするかなど、自分たちで模索をしなければならなかった。そこで、勉強会をしたり、ボランティアサークルに声をかけ

るなど、試行錯誤をしながら設置をしていった。

3つ目にあげられるのが、先例に学ぶタイプである。この1~3年の間に作られている大学・学生ボランティアセンターは、前例があるので、それらのところにヒアリングを行ったり、学生ボランティアのネットワークに参画することでノウハウなどを学び、自分たちのボランティアセンターの形を形成している。

3) 設置方法

ここでは、「誰が」設置をし、運営にかかわり、実際の活動を行っているのかを検証していく。実際の活動を行う主体を取り上げるのは、特に学校が設置しているものを見るときに、普通、学校の部署であれば職員が行うものである。しかし、大学・学生ボランティアセンターでは、学生がセンターの事業に関わっているという点が特徴として挙げられるので、ここで取り上げることとした。

図3-1-1に詳しいが、まず、設置主体について見ていく。設置主体は、学生、大学、学校法人の三種に分けられる。

次に、運営にかかわっているのが誰か、ということであるが、これは5つのタイプに分けることができる。1つ目は学生が行っているものである。ここへの大学教職員の関与はないといってよい。関与があるとすれば、顧問としてかかわってもらっている程度である。2つ目は、教職員により運営されているものが挙げられる。運営委員会というような、運営に関する会議体が設置されているところが多い。そして、3つ目として、教職員により運営がなされているものでも、学生がその運営に関する会議の場にオブザーバーとして参加できるタイプもある。この2つのタイプで言えることは、学生の声は専任職員が拾い上げ、運営に反映させているという点である。また、大学が設置している場合は、その運営に学生の直接的関与はまったくない。4つ目に挙げられるのは、学生と教職員により運営がなされているものである。このタイプはほとんど見られないといってよい。5つ目として、法人が設置しながらも学生のみが運営をしているというタイプが挙げられる。教職員は任意で学生をサポートしているという程度である。ヒアリングによれば、こ

のタイプは、センターの位置づけがあいまいであることから生じている位置づけである。

最後に、実際の活動がどのように展開されているのかを見てみたい。実際の活動は学生が行うものと、専任職員の何らかの指導の下におかれ学生が行うものの2つに分けることができる。特に専任職員の指導のもとにあるものについては、学生の自発的、つまり学生がこんな企画をやりたい、とって提案、実行できるかという点においても検証をした。ここでわかることは、教職員のみで運営を行っていようと、学生と教職員による運営であっても、つまりどのような運営体制であっても、学生の自発的な企画はまったく妨げられないということである。

では、各大学・学生ボランティアセンターが学生をどう捉えているのだろうか。

設置	運営	実際の活動	学生の自発的な企画	大学・学生 VC 名	
学生	学生 (いて顧問)	学生	有	早稲田学生 VC・ 大正大学学生 VC	
学校	大学	教職員のみ	職員の管理下	有	早稲田大学平山郁夫記念 VC
	学生がオブザーバー として参加可	職員の管理下	有	龍谷大学ボランティア・ NPO 活動センター 明治学院大学 VC	
法人	学生・教職員	学生	有	関西学院ヒューマン サービスセンター	
	学生	学生	有	立教大学 VC	

立命館大学ボランティアスタディセンターはこれに該当しない

図 3-1-1 誰が設置運営をし、実践をしているのか

明治学院大学ボランティアセンターにおいては、学生ボランティアスタッフには、「ミッションに賛同、チームとして動けるか、ボランティア意識があるか」によって、なることができる。2002年度より、サークルとして任意団体登録をした。その理由は、「学内外から見えやすい形を取るため」であるという。学生を入れる理由として、「学生のボランティアの推進を行うには、学生の視点が必要」ということである。

また、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターも、ボランティアスタッフがいる。それらの学生にかかわってもらう理由として、「主に活動するのは学生さんや一般の方なので、その方たちの意見を聞かずにプロジェクトを展開するのはナンセンスだ」というものがあげられた。

龍谷ボランティア・NPO活動センターでも学生のスタッフがかかわっている。学生を入れることについては、「センターの客は学生」であり、「センターにかかわる学生がいないと、学生の求めているものがわかりにくくなる」という理由からである。将来的には運営にも入ってもらいたいようである。

このように、学生がかかわることに関しては一貫して学生がボランティアセンターで活動することは必要である、と捉えているようである。その上で、学生がどのようなかかわりをするかは、各大学・学生ボランティアセンターによってさまざまである。このことを考えるときに、学生にとって、大学・学生ボランティアセンターは情報提供などを受けだけの場所ではなく、ボランティア活動をする拠点にもなりうることを示していることができる。

3-2 ミッション

大学・学生ボランティアセンターを運営していく上で、そのセンターが持つミッション、理念はそのセンターの運営にかかわる重要なものであるといえる。ここではそれぞれのボランティアセンターが掲げているミッションを見ていくこととする。

ミッションはさまざまな言葉で掲げられているが、共通するものとして、「ボランティアの活性化(推進)」を挙げることができる。「市民社会の発展」や「社会への貢献」などもキーワードになっているようである。「社会への

貢献」というのは、二つの視点から考えられる。まず、大学等が高等教育機関であり、研究をする場であることから、それらの研究成果を社会に還元していくという視点があるということである。次に考えられるのが、大学等が持つ教職員や場所などといった資源を生かすという点である。これらは、大学・学生ボランティアセンターに見られる特徴的なミッションだと考えられる。

また、大学が設置している場合、建学の精神との関係も無視することができない。これは大学・学生ボランティアセンターに見られる非常に特徴的なことだと考えられる。

ミッション系の大学である関西学院ヒューマンサービスセンターは規約上の目的に、その精神を明記している。また、龍谷ボランティア・NPO 活動センターは規約では触れていないものの、インターネット上で、

「一切の人間は平等に真実心を与られているという親鸞精神にもとづいて、そのことを自覚し、真に人間たるにふさわしい世界をひらくことをめざし、深い学識と教養とをもって大衆の一員として努力する人間の育成をめざす」とする建学の精神を具現化するものとして、学生・教職員のボランティア・NPO 活動の推進・促進とそのための環境整備を行います。」(6)

としており、建学の精神を打ちだしている。

規約上などにミッションを掲げているのは重要ではあるが、それが活かされ、浸透していなければ「飾り」にしかならないのも事実だ。そこで、ミッションの共有と確認がどこまでなされているのかを聞いた。

調査の結果は付録 2 に述べられているとおりである。ミッションの共有と確認に関していえることは、半数の大学・学生ボランティアセンターにおいて、十分なミッションの確認や共有はできていないのが現状であることがわかる。また、できているとしても、できたばかりだからできているという理由によるもので、今後、どのように展開していくかを注目して行く必要がある。

3-3 事業内容

事業というのは、大学・学生ボランティアセンターそれぞれのミッションの具現化として行われているものである。ミッションのキーワードとしてあげられているのは、先にも述べたとおり、「ボランティアの推進」、「市民社会の発展」、「社会への貢献」であった。これらの具現化として、大学・学生ボランティアセンターがほぼ共通して行っている事業として、ボランティアコーディネート事業、あるいは情報提供を行っている。

それに加え、雪ほりツアー（早稲田学生ボランティアセンター）や学童保育「ひまわり」（関西学院ヒューマンサービスセンター）、ノートテイク講座（明治学院大学ボランティアセンター）など独自の事業を行っているところが多い。

また、大学・学生ボランティアセンターの事業の特徴として、学祭への参加や、合同説明会つまり新入生歓迎会の開催、講義を行うなどがあげられる。

3-4 現在抱えている課題

では、大学・学生ボランティアセンターはどのような課題を抱えているのであろうか。ヒアリング調査では、それぞれの大学・学生ボランティアセンターからさまざまな課題が挙げられた。それらの課題を分類すると、人材、場所、ボランティアコーディネート、ミッション、資金、大学の中での位置という6つに分けることができた。また、少数ではあったが、教育との絡みや企業との連携、地域とのつながりなど、大学・学生ボランティアセンターにとって重要な課題であると思われるものも挙げられたので、その他としてまとめた。

1) 人材

どのような組織にしても人を欠いて組織が成立することはない。ヒアリングを行った8つのボランティアセンターのうち、6つのボランティアセンターから人材に関する課題が上がっている。人材に関する課題として挙げられ

るものは、3つの視点から考えられる。

まず、スタッフ数の絶対的不足である。立教大学ボランティアセンターと大正大学学生ボランティアセンター、早稲田学生ボランティアセンターからあがっていたものとして、ある学年がない、ということが挙げられた。この3つのボランティアセンターは、学生有志により活動が展開されているところであり、スタッフ不足は組織の存続にもかかわる。スタッフはそれぞれの学年に均一にいるわけではなく、例えば1年生と3年生はいるが、2年生がないというような現状がある。また、コーディネートなどの事業をやっていく場合、対象者となる学生などの数に対して、スタッフの数が絶対的に足りないということも課題としてあげられる。

次にあげられるのが、後継者の問題である。関西学院ヒューマンサービスセンターにおいては、スタッフの数はある程度いるが、活動はしたいが、組織をまとめていくことはやりたくない、という学生の声を聞く。次にリーダーとなっていく人材がないという課題である。

また、職員という立場での課題が挙げられた。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターでは、現在専任の職員が1名いるが、早稲田大学の特徴として、専門職採用がなく、職員は2、3年で異動をしてしまうという現状がある。ということは、どのように引継ぎをしていくのかなどが課題になるということである。明治学院大学ボランティアセンターも、それぞれのキャンパスに1名ずつ職員がいるが、目標に挙げている二つの項目に関して、一項目一人ずつの職員がほしいという。つまり、「学生ボランティアスタッフの育成をする人と、大学の社会貢献を進める人がそれぞれにほしい」ということである。

2) 場所

ボランティアセンターを動かしていく上で、どこで行うか、というのは重要な問題である。場所に関する課題として上がってきているものが、そもそも活動をする場所を確保できない、という課題と、更なる場所の充実を目指す課題とに分けられた。

まず、早稲田学生ボランティアセンターと立教大学ボランティアセンター

は、「活動する場所がない」ことをあげている。どちらも学生が主になってやっているボランティアセンターであり、大学との関係に起因して、独自の場所がない、ということである。立教大学では、チャペル会館を利用するにしても登録が必要だが、他団体も利用しており、空いている時間帯がないとのことである。また、早稲田学生ボランティアセンターは、現在は早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターの公認プロジェクトとしてコーディネート活動を行っているが、独自の部屋を確保したいということである。

次に、専用の部屋はあるが、活動の更なる発展を考えた際に生まれる課題が挙げられる。龍谷ボランティア・NPO活動センターの場合は、主な校舎から距離があって、学生が来にくい状況を招いている。明治学院大学ボランティアセンターは、学生ボランティアスタッフとともに活動をしたり、資料などの用品を置いたりするには「場所が狭い」という課題を抱えている。

3) ボランティアコーディネート

どの大学・学生ボランティアセンターにおいても、ボランティアコーディネートは重要な事業の一つであることは、3-3 で明らかである。そのボランティアコーディネートを展開する上で、コーディネーター自身のスキルの問題、学生に対するコーディネートを行う際の課題、情報提供に関する課題の3つが挙げられた。

まず、コーディネーター自身のスキルをあげていくものとして、龍谷ボランティア・NPO活動センターと早稲田学生ボランティアセンターは、「研修体制の確立」を課題としてあげている。これは、さまざまところで「ボランティアコーディネーター養成講座」といったような研修はあるが、自分たちのボランティアセンターのスタイルにあったものを確立していきたい、という視点から挙げられた課題である。

また、学生に対してコーディネートを行う際に、「学生のエンパワメントをどう行っていくか」(明治学院大学ボランティアセンター)、「待つだけのコーディネート」(龍谷ボランティア・NPO活動センター)をどう能動的にしていくかなどの課題が挙げられている。これは、職員がいかに学生に働きかけていくか、という課題であるといえる。

また、情報提供において、龍谷ボランティア・NPO 活動センターは、大学が3ヶ所のキャンパスを持っているが、現在は1ヶ所のキャンパスにしかないので、「情報の格差」をどう埋めるのか、ということ課題としてあげている。

4) ミッション

3-2 においてミッションについて取り上げ、ミッションの確認と共有はあまりなされていないのではないかという現状に触れた。

そこで下記のような課題があがってきている。

立命館大学は、今後どのようなミッションを掲げていくか、という「ミッション作り」を課題としてあげている。

一方で、関西学院ヒューマンサービスセンターは、この7年間ミッションの確認を怠っていることから、「ミッションの共有」の必要性を感じており、明治学院大学ボランティアセンターは、ミッションは根底に流れているとしながらも、「学生が課題を持って動いているか不明」としている。

ミッションは目に見えるものではないがゆえに、その確認や共有がメンバーの合意を得て行われているかも図ることができないという現実があり、それをどう共有していくか、という課題があるようだ。

5) 資金

これまで資金については触れてこなかったが、大学や法人が設置しているところに関しては、ボランティアセンター運営の資金は大学や法人によって賄われており、学生有志により運営をしているところは、賛助会費や助成金を獲得するなどしてその費用を賄っているというのが現状である。

そのような中で、下記のような課題があがっている。どちらの課題も、大学が設置をし、大学から予算配分がなされているボランティアセンターから上がってきたものである。

まず、明治学院大学ボランティアセンターは、「助成金をとって、予算ではできないことをしたい」としている。これは大学の予算では不足というわ

けではなく、「一つの大学や部署の枠組みを超えた企画を学長の許可から解放されて 100%実現する際や、学生が企画の準備に伴って必要になってくる交通費や食事代に自由に使えるだろうから」という理由からである。

また、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターは、「やろうとしていることに十分でない」ということから資金不足であり、そのために助成金などをとりたいが、現在そのノウハウもない、ということである。

6) 大学の中での位置

大学のなかで大学・学生ボランティアセンターはどのようにとらえられているのだろうか。以下の課題を聞くと、学生有志の活動はもちろんのこと、設置が大学や法人であっても、全学レベルで認知されているとはいえない状況があることがわかる。大学の中に設置されている大学・学生ボランティアセンターは、大学の中でどのような位置にあるのか、つまり認知をされているのか。そのような視点から大学との関係、認知という二つの視点から課題があがっている。

まず、大学との関係に関する課題である。学生有志でやっている大正大学学生ボランティアセンターは、「大学との関係をどう築くか」という課題を持っている。また、立教大学ボランティアセンターはチャペル会館内にあり、兼任ではあるが担当職員がいながらも、主に活動を展開している学生は「大学との関係が見えない」といっている。関西学院ヒューマンサービスセンターでは、資金や場所を学院から提供してもらい位置づけはきちんとされているが、実働レベルは学生であり、「教職員が現場にかかわらない」ことで、「学内での位置づけが見えない」という現状を抱えている。実際、学院設置とされながらも、学院組織図の中に明記されていない。

次に学内での認知の課題が挙げられる。早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンターは、「教職員に認知されていない」ことを課題としてあげている。同時に、プロジェクトは学生から応募があることを想定しているが、「学生のアイデアが思ったほど上がってこない」というのが現実としてあるようである。

7) その他

上記のものに含まれないものとして、教育との関係、企業とのコラボレーション、地域とのつながりという3点において、課題が出された。

まず、教育との関係について、答申などでボランティアに関する事項が取り上げられているのは先に見てきたとおりである。その中で、立命館大学ボランティアスタディセンターはそれらの「教育政策とどう連動させていくか」という課題を挙げている。この背景には、今後、情報化、国際化、体験というところで大学が文部科学省から評価を受ける場合、ボランティアセンターが増えていくものと考えており、そうした際に、ボランティアセンターの意義付けがわからなくなる可能性がある、ということが挙げられる。そのときにどうミッションを打ち出せるか、というところで、先の課題をあげている。

次に企業とのコラボレーションであるが、これは明治学院大学ボランティアセンターが挙げている。明治学院大学ボランティアセンターは、現在もソニーマーケティングの「学生ボランティアファンド」の事務局を担ったりしており、企業との連携をしているボランティアセンターである。今後もこのような連携を図っていきたいということで、どのように連携をはかっていくのがよいのか、という課題を挙げている。また、環境を整えば学生に委譲していきたいと考えているようだ。

地域とのつながりに関しても明治学院大学ボランティアセンターが挙げている。現在はコーディネートを受けるのが明治学院大学の学生が中心である。それをいかに地域に広げていくかということを探しているということである。

3-5 将来展望

上記のような課題を抱えながら、それぞれの大学・学生ボランティアセンターの職員、学生はどのような将来像を描いているのであろうか。ヒアリングでは、設置・運営に関する意見と、ボランティアコーディネートに関する意見が聞かれた。

まず、設置・運営に関してであるが、「大学の向かう方向を定めた上で、位置づけをしてほしい」(関西学院ヒューマンサービスセンター)とする声や、「大学として位置づけ、認識を、ボランティアセンターと近い教職員だけでなく、大学の姿勢として全体で共有できるとよい」(明治学院大学ボランティアセンター)という声が聞かれた。これは、現在、大学・学生ボランティアセンターが大学内で十分認知されていない現状を明らかにする発言といえる。

また、運営に関しては、「学生不在では、ボランティアセンターが大学の広報塔のみになってしまう」(早稲田学生ボランティアセンター)と、学生を取り込んだ運営をしていく必要性と、学生が運営にかかわらないことの危険性を指摘する発言も見られた。

次に、ボランティアコーディネートに関してであるが、「専門職としてのボランティアコーディネーターを置くべき」という声が、関西学院ヒューマンサービスセンター、早稲田学生ボランティアセンター、明治学院大学ボランティアセンターから聞かれた。また、関西学院ヒューマンサービスセンターによれば、今後も学生がコーディネーターをするのであれば、「専属のコーディネーターのスーパーバイズが必要」であるとし、ボランティアコーディネートには専門性が求められていることがわかる。また、実際にコーディネートを行うに当たっては、「ローカルなコーディネートを行えるようにしたい」(明治学院大学ボランティアセンター) また、「本当にボランティアをしたい学生をサポートできるボランティアコーディネートをする」(早稲田学生ボランティアセンター) ことを将来像として描いている。

3-6 まとめ

以上がヒアリングによって見えてきた大学・学生ボランティアセンターの姿である。大学・学生ボランティアセンターがどのように出来て、現在どのような状況にあるのか、また課題はどのようなものを抱えているのかを述べてきた。

課題は人材、場所、ボランティアコーディネート、大学の中での位置など多岐に渡っている。これらの課題は組織を作りあげていく上で必要なミッシ

ョンや人材、設置場所など基本的なものが多く見られたことが特徴として挙げられる。また、実際に事業を展開していくなかでの課題も挙げられた。メイン事業であるボランティアコーディネートにおいて、コーディネーターをどのように育成し、コーディネートをどのように行っていくか、模索の段階にあるということができる。

つまり、現在、大学・学生ボランティアセンターは、どのように設置し、どう運営していくかを手探りの状態ですすめている段階にあるといえる。

模索の段階にあって、それぞれの大学・学生ボランティアセンターが描く未来像として、キーワードを挙げるならば、「全学的に取り組む」「大学での位置付けの明確化」「専属の職員」「教職員のサポート」「学生の声を聞く」というものが挙げられる。これらの示すことは、大学の中でボランティアセンターを明確に位置付け、学生と教職員の協働により運営されていく、というのが理想として描けるのではないだろうか。

第四章 今、大学・学生ボランティアセンターに

求められること

第三章まで、大学・学生ボランティアセンターの現状を述べてきた。本章では、調査に基づいて、将来の大学・学生ボランティアセンターを描いていきたい。調査結果と併せて、大学・学生ボランティアセンターの理想的な形を検証し、なぜ大学・学生ボランティアセンターが必要であるのかを明らかにしていくことにする。

4-1 大学・学生ボランティアセンターに求められることとその存在意味

ここまで、ボランティア、ボランティアセンター、そしてボランティアコーディネーターについて述べてきた。大学・学生ボランティアセンターはボランティアセンターのひとつの形であるから、ボランティアセンターの理念

やコーディネーターの役割というのは変わらない。以下では、これまで述べてきた理念や役割を念頭に置き、大学・学生ボランティアセンターを設置するにあたり、どのようなことに注意したらよいのかをまず考える。そして、大学・学生ボランティアセンターに関わる人を中心に大学等に大学・学生ボランティアセンターがある意味を考察し、理想的な形を考えてみたい。

まず、よりよい市民社会形成の要になりうる大学・学生ボランティアセンターの設置を考えるときに、

- 1．一般的なボランティアセンターは何を目指すのかを知ること
- 2．なぜ大学にボランティアセンターを設置するのかを問うこと
 - 大学の組織にとっての意味は何か？
 - 学生・教職員にとっての意味は何か？
- 3．地域のニーズは何かを検証すること

という3点が求められる。前書きでも触れたが、現在の大学・学生ボランティアセンターは、専属のボランティアコーディネーターをおいていても、十分なコーディネートができていない、学長の名誉で作った、などといった歓迎できない状況におかれている場合もある。これでは、本来大学・学生ボランティアセンターが持つべき役割を十分に発揮できない。また、以下で述べるような十分な支援があっても、それではなんの効果も期待できなくなってしまふからである。

では、上記の事柄が検証されたことを前提としたときに描くことのできる理想的なボランティアセンターとはどのようなものであろうか。ここでは、大学・学生ボランティアセンターに関わる人との関係性の仲から検証していきたい。

大学・学生ボランティアセンターに関わる人を考えてみたときに、まず「学生」をあげることができる。学生は大学の中の主人公だからである。次に考えられるのが、「教職員」である。教職員は学生がよりよい学生生活を送ることができるよう学生をサポートする存在である。この2つの存在を囲むのが大学という組織である。また、同時に「地域社会の人々」という視点を忘れることはできない。大学は地域社会の中にあり、ボランティアセンターに

とって、依頼を発信してくる場所であり、ボランティアが送り出される場所であるからである。

ここで、3章で挙げられていた課題と将来構想を改めてみてみよう。課題は、人材、場所、コーディネートなど多岐に渡っていた。また、将来構想のキーワードとしては、「全学的に取り組む」「大学での位置付けの明確化」「専属の職員」といったことが挙げられていた。

これらの課題と将来構想をあわせると、図4-1-1に見られるような支援が求められる。まず、大学から大学・学生ボランティアセンターへの専属コーディネーター、場所、資金を支援することである。また、学生が情報提供や相談に乗ってもらうだけの受身の姿勢だけではなく、積極的に大学・学生ボランティアセンターと関わることができるよう、大学と学生の関係の明確化も求められる。つまり、理想的な状態というのは、大学、学生、教職員がミッションを明確にし、共有した上で、大学が大学・学生ボランティアセンターを設置し、専門職としてのボランティアコーディネーターを配置することで、全学的にボランティア活動の推進に取り組む状態ということができる。

では、理想的な大学・学生ボランティアセンターが設置されたときのそれぞれにとってのメリットは何であろうか。また併せてボランティア活動をすることによって得られる意味も考えていくことにする。図4-4-1をみるとわかるように、大学・学生ボランティアセンターが、学生、教職員、地域それぞれにとって、さまざまな意味があることがわかる。また、学生、教職員を囲む大学という組織にとっても、意味があることが見えてくる。

学生にとっては、学生生活を豊かにする手段であるといえる。また、あくまでも2次的であるが、社会的リアリティを持つことができる。これは、挨拶ができないなどといった基礎的社会経験のなさが問題といわれるが、それらを身につけることであるといえる。また、バーチャルリアリティの問題とあわせて、現実を感じるできない学生が増えているといわれるが、ボランティア活動によって、多くの人と接し、さまざまな社会課題を知ることによってその感覚は養われるといえる。その結果、学習意欲が高まるということもいえるだろう。

教職員にとっては、研究を地域との実践の絡みの中で行えるということである。また、地域とつながり、会社人ではなく、社会人として地域における

生活を豊かにする手段であるといえる。

また、学生と教職員に共通したものとして、社会のさまざまな課題を感じ、それを解決するなどの活動を通じて、市民性が高まるといえる。また、社会にはさまざまな人がいるということを知ることができるなど、視野の広がりも期待できる。

次に、学生、教職員が自発的に活動することが及ぼす大学への影響を考えてみる。学生、教職員の活動は、地域との資源の相互作用である。大学にとっては社会資源の導入になり、同時に、知的・物理的な資源を地域に還元することで、地域社会への貢献ができるといえるだろう。また、大学が単独で存在するのではなく、地域の中にあるという価値を生むことにもつながるといえる。

では、地域にとってはどのような意味があるのだろうか。大学にボランティア情報が広く公開されることにより、世代間交流や将来を担う人材の育成ができる。また、このことは、地域が元気になる仕組みであり、市民社会の形成が多様な世代によってなされていくといえることができる。

総合的に見てみると、市民社会の実現と成熟を目指して、大学・学生ボランティアセンターは、大学と地域の相互作用によって成り立っているといえることができる。

大学改革が叫ばれるようになって久しい。少子化の影響を受け、2009年には全入時代を迎えるといわれている。まさに大学淘汰の時代である。1998年に出された大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」では、国際化などと並び、「大学と地域社会や産業界の連携・交流の強化を図ることは大学がその知的資源をもって積極的に社会の発展に貢献するためにきわめて重要」とし、地域に開かれた大学の形成が不可欠であることを述べている。このようなことから、大学・学生ボランティアセンターという場所は、上記で述べてきたように、地域との結節点になる存在であるから、その支援を大学をあげてしていくことは、地域に開かれた大学を作っていくにあたり非常に有効であるといえる。

また、ボランティアセンターの理念のところでも述べたが、大学・学生ボランティアセンターは、その存在によって、学生と教職員の「自分たちの大

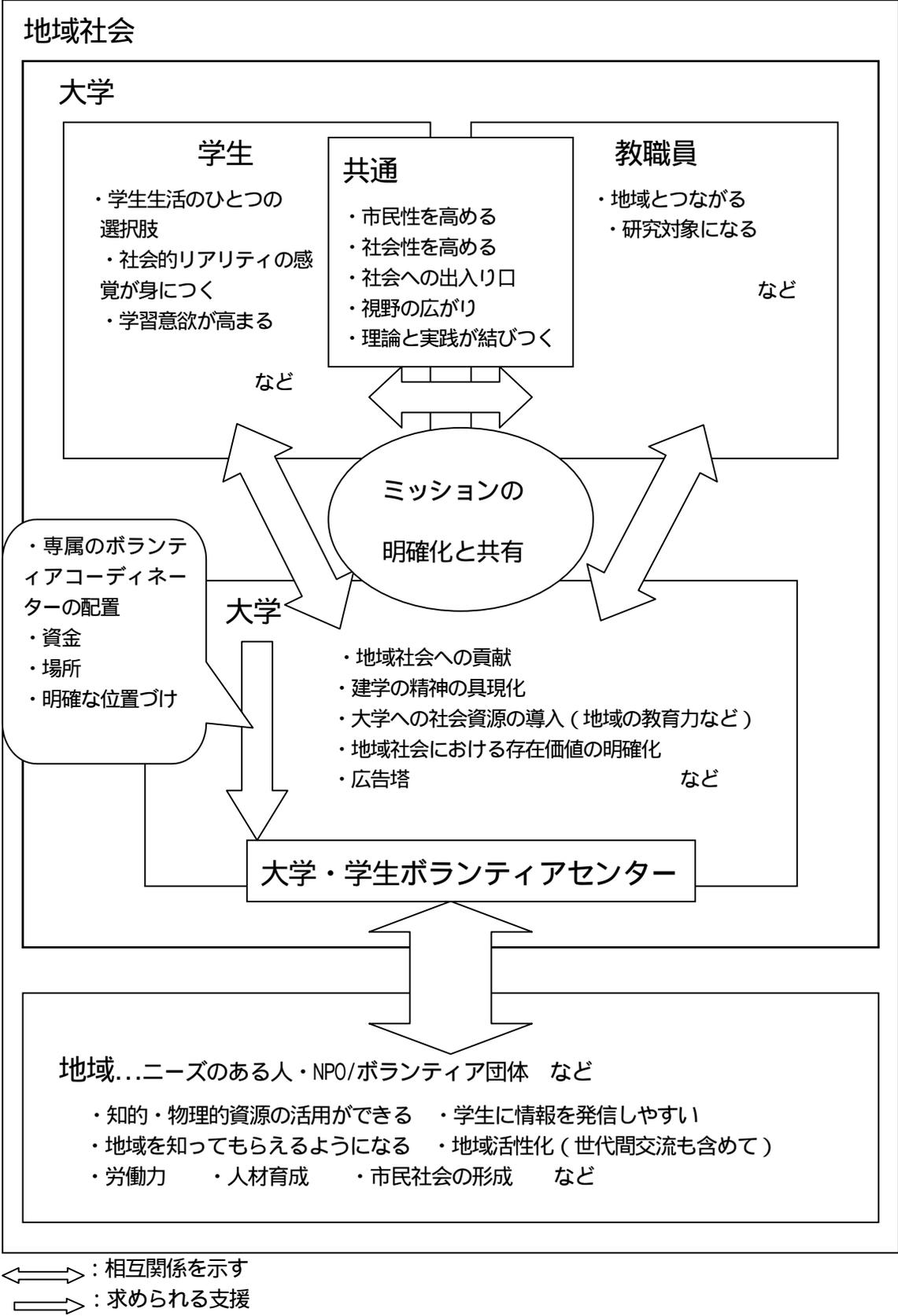


図 4-4-1 大学・学生ボランティアセンターに求められる支援とそのメリット

学や地域は自分たちの手で作っていく」という感覚を育てることになる。つまり、市民社会形成・成熟の要になる存在になりえるのである。

よって、大学がボランティアセンターを設置し、ボランティア活動を推進していくことは、非常に意義深いということができる。

<注釈>

- 1 1995年1月17日午前5時46分発生。震源地は淡路島。マグニチュード7.2。6400を超える命が失われた。
- 2 内外学生センター 2002 「平成13年度11月19日実施調査の協力を受けた大学等の学生ボランティア活動関係の担当部署一覧」
- 3
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/001/020901ca.htm による。2003年1月8日現在
- 4 関東圏のボランティアセンターやボランティアサークルのネットワーク
- 5 現在、学生・大学ボランティアセンターに関わる有志のメンバーによる、学生・大学ボランティアセンターが今後どうあるべきか、について研究をする会
- 6 <http://www.ryukoku.ac.jp/npo/about.html> による。2003年1月8日現在

<参考文献>

- ・雨宮孝子・小谷直道・和田敏明 2002 「福祉キーワードシリーズ ボランティア・NPO」中央法規
- ・渥美公秀 2000 「学生ボランティアの支援体制 ヨーロッパの事例」『大学と学生』 429 p.6-21
- ・青木佳之・青山英康・小田兼三・山田修平 1995「ボランティアの時代 新しいライフスタイル 中四国から」 山陽新聞社

- ・PF ドラッカー 1991 「非営利組織の経営 原理と実践」 ダイヤモンド社
- ・PF ドラッカー 1995 「非営利組織の『自己評価手法』 参加型マネジメントへのワークブック」ダイヤモンド社
- ・兵庫県社会福祉協議会 2001「県内社協活動の現況平成 13 年度版」 兵庫県社会福祉協議会
- ・池田勝徳 1999 『21 世紀の日本の社会とボランティア活動』青山社
- ・池田幸也 2001「学生のボランティア活動の推進・支援にむけて 大学・短大ボランティアセンターの可能性を探る」 『ボランティア白書 2001』 p.198-206
- ・石弘光 2002 「大学はどこへ行く」講談社新書
- ・経済企画庁 2000「平成 12 年度版国民生活白書 ボランティアが深める好縁」
- ・木谷宣弘 2000「ボランティアの森」 筒井書房
- ・興梠寛 1999「共生社会へのアカデミズムの新たな冒険」『大学と学生』 409 p.6-11
- ・興梠寛 1999 「ボランティア新時代に向かって 『断絶』の時代から『結ぶ』時代へ」 『ボランティア白書 1999』 p.10-21
- ・興梠寛 2001「学生のボランティアを支援する」 内外学生センターシンポジウム資料
- ・妻鹿ふみ子 2001「『思い』を『力』にかえるボランティアコーディネーター」 『部落開放』485 p.38-47
- ・巡静一・早瀬昇 1997「基礎から学ぶボランティアの理論と実践」 中央法規
- ・森田拓也 2001「ボランティア元年から市民社会の構築へ」『都市政策』 102号 p.25-37
- ・文部科学省 2002「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について(答申)」
- ・内外学生センター 2002「学生のボランティア活動に関する調査研究報告書 学生のボランティア活動をすすめるために」 財団法人内外学生センター

- ・NHK取材班 1995「ボランティアが開く共生への扉 阪神大震災からの報告」 日本放送出版協会
- ・大阪ボランティア協会 1981「ボランティア 参加する福祉」 ミネルヴァ書房
- ・大阪ボランティア協会 2001「ボランティアマネジメント・システムの日米比較研究 ボランティアセンターの多様なあり方を考える」 大阪ボランティア協会
- ・大森彌 1981 「住民の『元気』と自治の可能性」 『住民自治の権利 改訂版』 p.223-259
- ・岡本栄一 1987 「ボランティア活動の分水嶺」『変革期の福祉とボランティア』ミネルヴァ書房 p.220-249
- ・岡本栄一 2002「場 - 主体の地域福祉論」 『地域福祉研究』 No , 30 p.11-25
- ・岡本仁宏 2000 「大学とボランティア 市民社会化の展開の中で」『大学と学生』 p.429
- ・桜井猛 1995「ボランティア活動のすすめ 阪神大震災から」 けやき出版
- ・諏訪徹 2002「地域福祉とボランティア・市民活動」 『地域福祉研究』 No , 30 p.38-49
- ・高橋勇悦・高萩盾男 1996 「高齢化とボランティア社会」 弘文堂
- ・高畠通敏 2001「『市民社会』問題 日本における文脈」『思想』 2001年5月号 p.4-23
- ・田尾雅夫 2001「ボランティアを支える思想 超高齢社会とボランタリズム」 すずさわ書店
- ・徳平匡孝 2002「シティズンシップと市民社会の再生 私化現象との関連で」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』 別冊第9号(2)p.1-10
- ・東京ボランティアセンター 1997 「東京におけるボランティア活動推進のあり方検討委員会報告書」
- ・筒井のり子 1990 「ボランティア・コーディネーター その理論と実践」 大阪ボランティア協会

- ・塚田健二・竹森康彦・橋本由紀子・山本敦之・末吉秀二・岡崎幸友 2002
「ボランティアセンター基本構想に関する提言」『吉備国際大学 社会福祉学部研究紀要』第7号 p.191-202
- ・上野谷加代子 1996「ボランティアコーディネーターの役割と新任研修のあり方について」『月刊福祉』p.91-97
- ・内海成治・入江幸男・水野義之 1999「ボランティア学を学ぶ人のために」世界思想社
- ・吉村恭二 1999「ボランティアの世界 私が変わる 社会が変わる」築地書館
- ・全国社会福祉協議会全国ボランティア活動振興センター 2001「『第2次ボランティア・市民活動推進5ヵ年プラン』と『社協ボランティア・市民活動センター強化と発展の指針』」
- ・全国社会福祉協議会地域福祉部地域福祉推進委員会 2000「2000年社会福祉協議会活動実態調査報告書」社会福祉法人全国社会福祉協議会

付録1 大学・学生ボランティアセンター

- ・北海道大学学生ボランティア活動相談室
- ・敬和学園大学ボランティアセンター
- ・金城学院大学ボランティア活動推進室
- ・関西福祉大学学生ボランティアセンター
- ・松山東雲女子大学ボランティアセンター
- ・長崎純心大学純心ボランティアビューロー
- ・共立女子短期大学ボランティアセンター
- ・和泉短期大学実習・ボランティアセンター
- ・長崎純心大学短期大学部ボランティアビューロー
- ・立教大学ボランティアセンター(池袋・新座)
- ・淑徳大学短期大学ボランティア情報室
- ・大正大学学生ボランティアセンター
- ・明治学院大学ボランティアセンター(横浜・白金)
- ・東北福祉大学ボランティアセンター
- ・長野大学ボランティアセンターふらっと
- ・桜の聖母短期大学ボランティアセンター
- ・聖学院大学ボランティア部会
- ・亜細亜大学ボランティアセンター
- ・神戸大学総合ボランティアセンター
- ・関西学院ヒューマンサービスセンター
- ・麗澤大学ボランティアネットワーク
- ・中央大学 IFN
- ・立正大学社会福祉学部ボランティアセンター
- ・常磐大学ボランティア情報センター
- ・淑徳大学ボランティアセンター
- ・龍谷大学ボランティア・NPO活動センター
- ・信州大学 Volnet
- ・日本社会事業大学ボランティアセンター
- ・国際ボランティア学生協会

- ・城西大学ボランティアサークルJ - N E T
- ・早稲田学生ボランティアセンター
- ・早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター
- ・共立女子大学ボランティアセンター
- ・東海女子短期大学ボランティアセンター
- ・中央学院大学アクティブセンター
- ・立命館アジア太平洋大学ボランティアセンター
- ・富士常葉大学
- ・静岡英和学院大学ボランティア室
- ・東洋大学ボランティアセンター
- ・鳥取大学(ふるさと文化研究会)
- ・福山平成大学ボランティア情報室
- ・佛教大学ボランティア室
- ・桃山学院大学ボランティアビューロー
- ・大阪キリスト教短期大学ボランティアコーナー
- ・立命館大学ボランティアスタディセンター(仮称)
- ・日本児童教育専門学校

付録2

名称	設立年	設置理由	準備	設置方法
関西学院ヒューマンサービスセンター	1995	「ボランティアをしたい学生、ボランティアを必要とする人たちは平常時でもいるのではないかと考え、震災時にできた救援ボランティア委員会を改組・改称	特になし	学校法人
早稲田学生ボランティアセンター	1996	震災時の活動をうけて、「早稲田に学生側の組織として中間支援組織があるといい」ということで、ボランティア関係のサークルの中からメンバーが集まった。	ボランティア関連のサークルに声をかける・規約作り	学生有志
明治学院大学ボランティアセンター	1997	「震災ボランティアに行った学生のボランティアを学生に紹介する場所を持ちつづけたいという希望」が背景・また、創立120周年ということもあった。	副学長や教員が中心となって、どのようなボランティアセンターを作っていくのかに関する勉強会・規程の作成	大学
龍谷ボランティア・NPO活動センター	2001	阪神・淡路大震災後、ボランティアに行った学生や教職員に対してその経験などを活かす場がなかったこと、ボランティアに興味はあってもどこに行ってもいいかわからないという現状	発足に向けて調査、準備、学内ロビーイング、人を介してあちこちの大学の方に情報を求めた	大学
大正大学学生ボランティアセンター	2002	1996年に大正大学ボランティアコーナーができるが、1998年に活動休止。2001年に復活の声があがる。その背景には、ボランティア情報は大学にたくさん集まってくるが、ボランティア情報の掲示の場所が不明瞭など、学生がボランティアに参加しやすいかといったら決してそうではないという現状があった。	SVnetへの参加、ボランティア系サークルを対象とした説明会、プレボラセンを社会福祉学専攻内で準備など	学生有志
立教大学ボランティアセンター	2002	もともと大学に来る情報を掲示する場所があったが、2001年秋頃、チャプレンとチャペル事務の人が掲示板が活用されていないからどうにかしたいと思い	SVnetの合宿への参加・埼玉の学生ボランティアネットワークに参加・学生スタッフの募集や掲示板があることを広報	学生・教職員有志
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	2002	平山郁夫氏からの絵画の贈呈の条件として、国際的な社会貢献活動を推進してほしい、というものがあつたことが挙げられる。また、総長の持論として、「大学において教育、研究にとどまらず、社会貢献をして行くべきである」というものがあつた。	教職員により目指すものの検討・組織体制の整備・規約整備・場所の確保・社会貢献、コミュニティサービスがどのように行なわれているかをアメリカのスタンフォード大学、コロンビア大学などの事例で検証	大学
立命館大学ボランティアスタディーセンター	-	麒麟福祉財団、京都市社会福祉協議会と立命館大学との学術協定の一環、ボランティアスキルマッチングエージェンシーというプログラムが展開されている。	衣笠学生のボランティアに関する意識と活動自体に関する調査、衣笠学生サークルとボランティア活動の関わりに関する実態調査、他大学ボランティアセンターヒアリング調査、サービスラーニング研究会、「これからのボランティア・ボランティアコーディネートを考える集い」(シンポジウム)	未定

付録 3

名称	ミッション	本来の共有の場	共有の現状
関西学院ヒューマンサービスセンター	「関西学院ヒューマンサービスセンター（以下HSC）は、関西学院のスクールモットーであるマスター・フォアサービスの精神に基づき、関西学院を中心とするボランティア活動の活性化をすすめる、同時に関西学院と地域との開かれた関係を築くことによって、豊かな市民社会形成に貢献することを目的とする。」	運営委員会・総括会議	5年をめどに見直しを行う予定であったが行われていない。現在は、総括会議において学生レベルで行われている
早稲田学生ボランティアセンター	「1．学生の自主活動であるボランティア活動の推進 2．早稲田大学のボランティア系サークルのネットワークづくり 3．ボランティアを必要としている者に対するの援助 4．早稲田地域への社会貢献 5．ボランティア活動発展のための研究」	運営総会	運営総会において見直されている
明治学院大学ボランティアセンター	「学生等によるボランティア活動を推進するため」web上「市民社会の発展のため、市民として責任ある自主的な生き方や公共心（社会をよりよく変えていく意欲とリーダーシップ）を育てる」「学生のボランティア活動や大学の知的資源などを生かし、（地域）社会への貢献に努める」	運営委員会	「根底に流れている」もので、「（設立準備時の）勉強会でも流れていた」。「ミッションの確認をすべき」であるという発言からも十分な共有、確認がなされているわけではないようである
龍谷ボランティア・NPO活動センター	「センターは、営利を目的としないボランティア活動を通じて、相互に学び合うサービスラーニングという共生の理念を具現化し、本学の教育研究に寄与することを目的とする」	センター委員会	3年後に見直しを行うとしている
大正大学学生ボランティアセンター	「ボランティア活動を希望する学生への支援」「学生がボランティア活動に参加しやすい、よりよい環境を整える」	不明	なされていない
立教大学ボランティアセンター	ボランティアの活性化を目的	不明	なされていない
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	「本学名誉博士である平山郁夫氏（以下「平山氏」という。）の国際的社会貢献活動とその精神を継承し、平山氏が推進してきた諸活動をさらに推進・発展させるとともに、ボランティア活動を広く国内外で展開し、かつ、支援することによって、地域社会及び国際社会へ貢献することを目的とする。」	管理委員会・運営委員会	1年後に見直しを行うとしている
立命館大学ボランティアスタディーセンター			

名称	活動内容 規約上など	具体的な活動	学生のかかわり
関西学院ヒューマンサービスセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア・非営利組織・市民社会に関する、学内外における研究事業 ・ボランティア・非営利組織・市民社会に関する、学内外における教育事業 ・関西学院の教職員・学生・生徒・卒業生、およびその他地域社会の人々へのボランティアコーディネーション事業 ・ボランティア活動のインキュベーション ・学内ボランティア諸団体のネットワーク形成とそれぞれの団体の事業に対する協力内外ボランティア団体、非営利組織など上記目的に合致した諸団体とのネットワークの形成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアコーディネート ・学童保育「ひまわり」 ・ボランティア情報サービスネットワーク ・講義「ボランティアとNPO/NGO」「市民社会とNPO/NGO」 	学生主体
早稲田学生ボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア情報の収集と発信 ・ボランティアのコーディネート活動 ・ボランティア推進のためのイベント開催 ・ボランティアに関する調査と研究 ・その他、ボランティア推進のための活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアコーディネート ・ボランティア入門講座(月一回) ・雪ほりツアー ・ネットワークの中で、様々なイベントへの参加 	学生主体
明治学院大学ボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア活動の紹介 ・ボランティアセンター学生スタッフの育成と活動 ・地域と学生の橋渡し ・ワーキングキャンプの実施 ・ボランティア公開講座 ・ボランティア公開講演会 ・ボランティアグループ合同説明会 	<ul style="list-style-type: none"> 4月: 新入生へのアンケート(ニーズ調査) 学生ボランティアスタッフの勧誘・合同説明会 6月: 大学祭への参加 7月: ボランティアオリエンテーション 9月: リートイクボランティア養成講座 11月: 公開講演会 その他・ソニーマーケティングの「学生ボランティアファンド」の事務局 	専属職員のもとで学生が関わっている
龍谷ボランティア・NPO活動センター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア・NPO活動を通じた人材育成及び教育支援に関する事項 ・本学の教育研究活動とボランティア・NPO活動との連携に関する事項 ・本学の教育研究活動に相応するボランティア・NPO活動の環境整備に関する事項 ・その他、龍谷ボランティア・NPO活動センター委員会が必要と認めた事項 	<ul style="list-style-type: none"> ・相談会・国際NGOの展示会・講演会・ワークショップ・ボランティアコーディネート 	ボランティアコーディネーターは、学生アルバイトのコーディネーターと学生ボランティアスタッフがペアになり行っている。また、企画イベントに関しては学生側から上がってきた企画
大正大学学生ボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア情報の整理・掲示 ・ボランティアをやりたい人への相談対応と情報提供 ・機関紙の作成 ・学習会やセミナー、講演会、イベントなどの開催や参加 ・その他ニーズに答える 	現在、準備中	学生主体
立教大学ボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア情報の提供 ・ボランティアの紹介 	左に同じ	学生主体
早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター	<ul style="list-style-type: none"> ・平山郁夫氏が推進してきた国際・国内社会貢献活動の継承・発展 ・国内外のボランティアプロジェクトの企画・支援等を初めとする活動機会の提供 ・ボランティア活動に関する教育事業 ・ボランティア活動に関する調査研究 ・ボランティア活動に関する情報提供 ・企業等における社会貢献部門設立への働きかけおよびその支援 ・平山郁夫氏からの寄贈物に関する委託事業 ・賛助会員制度等を含むファンドレイジングの強化 ・その他センターの目的を達成するために必要な事業 	<ul style="list-style-type: none"> 現在の公認プロジェクト: 松代町雪ほりツアー 2003・ラオス学校建設プロジェクト・ボランティア相談会・ボランティア入門講座 	学生などからやりたいことに関する提案を受け、運営委員会で選考をし、公認プロジェクトとなる。主体はさまざまだが、学生が企画するものが多い
立命館大学ボランティアスタディーセンター			-